



2021 フィールド Vol.2 スタディ カタログ

2020年度Ⅱ期（春休み）に実施したフィールドスタディを
収録しています。



「持続可能な地域づくりの方法を考える」

担当教員 金藤 正直

コースの概要

日程 2021年3月12日（金）、16日（火）
場所 長井海の手公園・ソレイユの丘、谷津干潟自然観察センター
参加人数 8名

コースのねらい

このコースでは、訪問先での地球環境の歴史、自然災害への対策、自然環境や生物多様性の保全、環境保全型農業とこれによる地域振興策などに関する学習・体験を通じて、将来必要とされる持続可能な地域づくりの方法を検討していくことを目的としました。

内 容

フィールドスタディは、2月下旬から3月上旬まで実施する予定でしたが、緊急事態宣言により訪問日程を1週ずらしました。しかし、その後の宣言延長により、訪問する予定だった6つの施設のうち、4カ所訪問することができませんでした。そこで、ここでは、訪問できた2カ所の施設での取り組みを紹介します。

まず12日（金）に訪問した長井海の手公園・ソレイユの丘では、園内の説明とともに、三浦半島の自然を活かした以下の体験を通じて、地域の環境保全や生物多様性を高めていくための方法について学習することができました。

●はち育

はち育とは、園内で飼育しているみつばちの特性を活かした環境教育プログラムであり、ソレイユの丘では、ここで採蜜したはちみつを使い、商品開発等地域連携の促進や地域振興を図っています。ここでは、地域連携や地域振興の方法だけではなく、養蜂場の見学と地元養蜂家による解説を通じて、みつばちの生態や生物多様性について学びました。



はち育体験の様子

●収穫体験

ここでは季節の野菜を収穫し、また地元農家による解説を通じて、農業を通じた地域振興（野菜の販売だけではな



収穫体験の様子

く、周辺の学校への教育支援など)の方法を学びました。

●ふれあい動物村

ここでは、飼育員による解説を通じて、動物とふれあうことで感じる生命や環境の大切さや、排泄物を使った堆肥を植栽に活かす循環型管理システムについて学びました。



カビパラとふれあう参加学生

次に、16日(火)に訪問した谷津干潟自然観察センターでは、ラムサール条約登録地の谷津干潟の基礎を座学で学習し、またその後、レンジャーの案内で干潟に入り、干潟内の生物を観察し、また、東京湾から干潟に漂着したゴミやマイクロプラスチックを拾い集める、といった体験も行いました。このような取り組みを通じて、地域としての干潟保全の必要性と干潟の価値について学習することができました。



干潟内の生物観察の様子

学習を終えて

今回は、緊急事態宣言やその後の延長により、訪問予定であった6カ所の施設のうち、2カ所のみでの学習だったために、コースのねらいに示した「地球環境の歴史、自然災害への対策」の目的は十分に達成できませんでした(訪問できなかった4カ所の施設での学習については、協力機関の西武造園(株)から提供いただいた映像資料を使用し、学生各自で行ってもらいました)。しかし、訪問先での「自然環境や生物多様性の保全、環境保全型農業とこれによる地域振興策などに関する学習・体験を通じて、将来必要とされる持続可能な地域づくりの方法」については、参加学生に対して学習機会を提供することができました。最後に、参加学生の声の一部を紹介します。

●実際にフィールドに出て学べるという体験はとても貴重でした。専門家の方々の意見を聞けて、自分の考えにも刺激が生まれ、とても良かったです。

●制限のある中でしたが、できる範囲で実際に体験をしながら考えることができ、大変貴重な経験となった。

●ビジネスデザインシートを体験学習の前に一度考えて、体験後にもう一度デザインシートを作ることは自身の考えの変化に気づくことができ、大変良い経験であると思いました。FSの全体を通して見ても非常に実りある時間となり、参加して良かったと思っています。

●コロナ禍でしたが、オンラインでの事前学習・事後学習や日帰りの現地調査でフィールドスタディを体験できたので良かったと思う反面、やはり少し物足りなさを感じました。

●他の参加者と一緒に様々な体験を通じて勉強することができ、とても良かったです。

「大久保商店街（千葉県習志野市）のアメニティマップづくり」

担当教員 吉永 明弘

コースの概要

日程 2021年2月10日～2月28日の任意の4日間

場所 千葉県習志野市大久保商店街周辺、および参加者が選んだ商店街

参加人数 4名

コースのねらい

- (1)「アメニティマップ」という手法を用いて、自らの環境に対する評価を可視化します。また他者の評価との比較を通じて、環境評価の多様性を確認します。
- (2)「空間の履歴」をふまえて環境を評価する手法を習得します。過去の地図を見ながら商店街を歩き、地域の歴史をふまえて現在の姿を評価します。
- (3) ある地域を他の地域との比較によって評価する手法を学びます。

内 容

(1) 各自で大久保商店街の「アメニティマップ」（良い所と悪い所を評価したマップ）を作成しました。

学生が評価したアメニティポイント①

学生が評価したアメニティポイント②

街灯に付属している、ベルを模したスピーカー

縁石のない平らな道



アメニティポイント（良いところ）としては、薬師寺瑠璃光苑、縁石のない平らな道、ベルを模したスピーカー、店の多様さと手軽さ、下町の雰囲気、海外からの店舗、医療施設の充実などが挙げられました。

ディスアメニティポイント（悪いところ）としては、シャッターが閉まっている店、道幅の狭さと自転車・自動車の危険性、空き地と粗大ごみなどが挙げられました。

商店街全体としては、駅から近く、人通りも多く、古くからの店と新しい店が混在しており、近くの公園や神社に開かれており、老若男女に対応したアメニティがある、学校が多く学生の街である、という評価がなされました。

(2) 90年前の地図を見ながら、現在も存在するお店を巡り歩きました。

空間の履歴：90年前の地図にも載っている本屋と酒屋



写真にある本屋と酒屋のほか、八百屋、肉屋、時計店など、いくつかの店舗が今も営業していました。開店当時から変わらぬ外観の建物と、建て替えられた店舗の両方がありました。建て替えられても、店の中には過去の歴史を示すもの（開店当時の賞状など）が残っていました。

(3) 他の地域との比較

参加者が各自で選んだ地域（成田市表参道商店街、佐倉市京成志津駅付近、厚木一番街商店街）のアメニティ調査を行い、大久保商店街との比較を行いました。また、参考資料として、松戸市本土寺参道の映像と、松山市と高松市の商店街の写真を提示し、それらとの比較も行いました。「地元向け／遠方からの観光客向け」、「歴史を感じさせる／感じさせない」といった区分による考察がありました。

各自のアメニティマップに対する教員からの講評を聞いた後で、各自のマップに対する反省とともに、他の人との視点の違いなどについて綴られたレポートが提出されました。同じところを歩いても違ったところに目が向けられ、異なる評価がなされることが実感できたようです。

学習を終えて

今回のフィールドスタディは環境哲学基礎論を履修した人を優先としているだけあって、その講義での内容があちこちに散りばめられていたし、その講義での経験を活かして、アメニティマップの作成の仕方も発展させる形で資料作成を行うことができよかったです。

私は今回アメニティマップを作成するにあって比較するというのを1番意識しました。大久保商店街と地元の厚木一番街の違いや、地元のアメニティマップでも前回と今回で2回行った時にどのように変化があるのかを意識して作成しました。

大久保商店街や厚木一番街は住みやすいということを書きました。地域の人への利用に特化しているため、遠くからの観光客は少ない印象でした。いろいろなところのアメニティマップを作れば、それぞれの商店街のもつ特性に気付くことができるということもわかりました（3年 男子学生）。

「ウンコと下水道から考える環境史—文明転換についてのダイアログ」

担当教員 湯澤規子、根崎光男

コースの概要

日程

場所 当初予定：東京都下水道局・水再生センター、旧三河島污水処分場唧筒場施設、東京都水道歴史館、小平市ふれあい下水道館などの見学

実施：各受講生の身近な場所および人への調査（自宅付近、祖父母の家など）

参加人数 4人

コースのねらい

私たちが生きるうえで欠かせない身近な事象から、環境について等身大の議論を試みる。今回は「ウンコと下水道」をキーワードにして、江戸時代から現代までの日本、19世紀～21世紀のヨーロッパとアジアの比較研究を中心に論じ、文明転換についてのダイアログ（対話）を受講生と共に深めることを目的とする。

内 容

①身近な聞き取り調査、②身近なフィールド調査、③関連する施設見学を組み合わせる予定であったが、緊急事態宣言下で③が困難であったため、①と②を組み合わせたフィールドワークを実施した。

具体的には汲み取り式から水洗式への転換に着目した「年代別に見るウンコ・トイレ観」についての調査（埼玉県）、聞き取り調査やトイレ施設の現地調査による「うんこ・トイレの色々な捉え方」についての調査（北海道ほか）、祖父母への聞き取り調査による「下肥利用の技術」（静岡県）、「便所と農業と動物の関係」（神奈川県、秋田県）についての調査が各受講生によって実施された。いずれも知人や家族など、身近な人びとへの聞き取り調査により、具体的な情報が集まり、地域差、世代差などを比較検討することができた。

学習を終えて

当初予定していた施設見学は緊急事態宣言下の施設閉鎖などにより実施できなかったが、その代わりに学生たちが工夫して実施した聞き取り調査、路上観察、統計データの収集などは興味深いものが多かった。4名の受講生それぞれのテーマや調査対象とする時代や世代が異なっていたために、事後学習の内容が充実したものになった。ただし、体験の場や機会など、with コロナのFSとしては、まだ工夫の余地があると感じたので、引き続きその方法を考えていきたい。